



## 馬耳東風

「火焰太鼓」という落語がある。野暮を承知で梗概を書く。いつも損ばかりしている商売下手の道具屋が、ある時古い太鼓を市で仕入れて来た。店に帰って小僧に埃をはたかせていると、近くを通りかかったお殿様がその音を聞き、実物を見たいから屋敷に持参させるよう家来に命じた。女房に、「こんな汚い太鼓を持っていくと殿様のご機嫌をそこねて庭の松の木に縛り付けられて当分帰ってこれないよ」とかなんとか毒づかれながらも持参すると、殿様は、「これは火焰太鼓という世に二つと、というほどの名器で国宝に近いものだ」といって300両で買い上げてくれた。舞い上がって帰宅した道具屋は、いつもは尻に敷かれている女房に日頃の鬱憤を晴らすかのように自慢たらたら小判を勘定しながら報告した。そして、「こんどは半鐘を買ってきて叩くんだ」という亭主に対して、「半鐘はイケナイよ、おジャンになるから」という女房の地口落ちでおしまいという話である。私は、志ん生のこの落語が好きで、これまでに100回以上は聞いていると思う。筋も何もかも熟知しているにも関わらずまた聞きたくなってしまう。こういうのを話芸の極致というのであろう。

さて、この話のマクラに、道具屋を冷やかしに来た客が、「何か珍しいモノはないか」と言うのに対して、「鎮西八郎為朝が小野小町にやった手紙がある」という。客は一瞬、「それは珍しいナア」と乗り気になるが、「待てよ、鎮西八郎為朝と小野小町じゃ時代が違うよ、あるわけがない」という客に、「あるわけがないのがあから珍しい」と道具屋が応じる場面がある。落語のマクラとかくすぐりは、演じる人が付け加えたりちょっと変えた

りするものであり、現に志ん朝の「火焰太鼓」では、小野小町が清水次郎長にやった手紙に変えられている。おそらく平安時代前期の小野小町と同末期の鎮西八郎為朝よりも平安時代の小野小町と江戸時代の清水の次郎長の方が時代の違いが誰にでもすぐわかるから変えたのであろう。

それはともかく、これまで私はこのマクラは元々あったものなのか、それとも志ん生の創作なのかということ考えたことはなかった。ところがある時、徒然草に同工異曲の話があるのを知ってからこの疑問が生じたのである。徒然草第八十八段に次のような話がある。ある人が、「小野道風が書いた和漢朗詠集だ」といって持っていたのを別の人が、「お宅に代々伝えられてきたお品なのですから根拠のないことではないのでしょうか、和漢朗詠集を小野道風が書くのは時代が違いますので、その点が不安で」といったところ、「だからこそ世にもまれな珍品なのですよ」といってますます大切に秘蔵したそうだと兼好は何の感想も付け加えずにこの話を紹介している。道風と和漢朗詠集の前後関係を知らなかったので調べたところ、小野道風は967年没なのに対して、和漢朗詠集が作られた（撰ばれた）のは1018年ということだった。したがって、小野道風が和漢朗詠集を書けるはずがないということになる。志ん生が徒然草を読んで小野小町と鎮西八郎為朝の恋文に変えたのだろうか、それとも、もともとマクラとしてあったのだろうか。この落語を有名にしたのは志ん生であるが、作られたのは江戸時代らしい。調べることは可能なのだろうかそうはしたくない。大酒のみで破天荒な生涯を送ったが落語にはきわめて真剣であったという志ん生が、密かに徒然草を読んであのマクラを考えたと考えていたのである。

(久)